



505号室



先日、友人が人工股関節の手術を終え、無事に退院した。

「おめでとう。大変だったけど、またあちこち行けるね、よかったあ」

そんな話をしている、昔の姑の騒動がくっきりとよみがえった。

私の姑は名を鈴子という。大正八年生まれ、末年、乙女座、血液型はO。ずっと同居だったにも拘らず、複雑でかなりねじれた性格のため、なんとか彼女を理解できるようになるまで二十年かかった。息子である夫は未だによく分かっていない。舅は私が嫁ぐ前に亡くなり写真でしか知らない。鈴子さんは、色白の美人で常に鏡を見、お化粧をし毛染めした髪をきちんと整えていた。そして、事あるごとに言ったものだ。

「加代子さんはいいわねえ。足首をほっそり産んでもらって。私は大女に産まれてどんなに損をしたことか」

だから、女の子の孫に絶えずささやいていた。

「小さくなれ。小さくなーれ。大きくなったらお祖母ちゃんのように苦労するよ」

「いやー、いくらなんでもそれはないですよお」

私は、呆れて笑っていた。

鈴子さんは孫の面倒をよくみてくれ、仕事をもっている私の代わりに家事もこなしてくれた。普段は明るくて、プロ野球のテレビ中継を見ることが好きだった。だから、たまに車でブティックへ一緒に行くと、頬を染めてそれは嬉しそうにしていた。ただ感情の起伏が非常に激しい人で、その大波をもろに被るのは主に私だった。

ずっと丈夫だったけれど、七十才を過ぎたころから足の付け根の痛みを訴え、次第に歩くのも辛くなり、何度も整形外科を受診した。そして、医師の勧めもあり悩みに悩んだ結果、手術を決めたのだ。

みぞれ混じりの雨が降る二月の夕方、私は頼まれて買ってきたパジャマを手に、急いで病院へ入った。エレベーターを降りると、五〇五号の病室に看護婦（当時はそう呼ばれていた）さんが慌ただしく出入りしているのが目に入り、何事が起こったのかとバクバク鳴る胸を押さえた。

そんな私の耳に鈴子さんの怒鳴り声がひびいてきた。ベッドのまわりに医師と何人もの看護婦さんが取り巻いている。こわごわ近づいた私を見つけた鈴子さんが大声で叫んだ。

「加代子さん、もう帰ります！」

「えっ、えー！」

私は脳天から声を上げた。

「明日手術ですよ。そんなことはできません。先生もみなさんも準備してくださっているんですから」

そう言う私を睨みつけると、今度はティッシュの箱を抱えて泣き出した。

「こんな恐ろしい手術だとは知らなかった。だれも今まで教えてくれなかった」

確かに、今から二十四年前の人工股関節置換手術は簡単なものではなかった。だから七十四才の鈴子さんにも分かるようにかみ砕いて説明してきたつもりだ。手術前の自己血輸血の採血にも付いて行った。だから、（ここまでくるの、大変だったなあ。明日からも色々あるけどがんばらねば）

そう自分に活を入れながら今もここへ来たのだ。

「よく納得させてくださいね」

医師も忙しいのだろう、そう言いおいて廊下に出てしまった。

私は転がるように看護婦詰所へ入って行った。床に頭が付きそうなほどお辞儀をして詫びた。ふと見ると、鈴子さんがガウンの上にストールをかけたまま、足を引きずってエレベーターの前まで行っているではないか。慌てて乗り込んだ私に、

「帰ります。荷物をお願いします」

きっぱりとそう言った。

「えっ、えっ、えー！」

今度は喉の奥から掠れた声を上げた。頭の中が真っ白な私はそれでも五〇五号室に戻り、荷物を詰め込んだ。(どうしてこんなにたくさん要るのよ！ピンクの花柄のパジャマばかり)

心の中で悪態をつきながらカバンに投げ込んだ。手の甲にポトポト水が落ちた。汗か涙か、両方だろう。

「一旦帰らせていただきます。言い出すと頑としてきかないものですから。申し訳ありません。本当にすみません。なんとお詫びすればいいか」

顔を床に向けたまま、ただただひたすらお辞儀をして一階に降りた。照明を落としたロビーに、鈴子さんは背筋を伸ばして座っていた。

帰宅した夫が爆発したのは言うまでもないが、後処理は私だ。煩雑な書類を提出し終えてやっと一息ついた頃にはまた、

「痛い！痛い！」

鈴子さんは昼も夜も言い続けた。そして、なんとまた同じ病院へ通いだしたのだ。

(あの病院へは顔向けできない。恥ずかしくて行けない)

そう思うものの仕方がない。いろんな手続きを繰り返して、あの日から三か月後、手術を受けた。

先生は苦笑いしつつ言った。

「おっ、脱走犯が戻って来たのか。再犯は許されへんぞ」

鈴子さんは、いつものように背筋をのぼし上品にお辞儀をして言った。

「どうぞよろしくお願ひ申し上げます」

そして、病室はまた五〇五号室だった。

手術後は看護婦さんを巻き込む騒動を繰り返しながらも、なんとか退院した。

その後、九十四才で亡くなるまで、杖をつきながらも、自分の足で歩いた。最後は人生の帳尻を合わせたのだろうか、とても静かに息を引き取った。

法事などで親戚が顔を合わせると、エピソードに困らない鈴子さんだけれど、やはり「脱走武勇伝」で会食がお開きになるのである。